

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	アンモニア分子の反転振動に関する状態選別と分布制御
Title(English)	
著者(和文)	上野一樹
Author(English)	Kazuki Ueno
出典(和文)	学位:博士(理学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12029号, 授与年月日:2021年6月30日, 学位の種別:課程博士, 審査員:大島 康裕,石内 俊一,腰原 伸也,森 健彦,山崎 優一
Citation(English)	Degree:Doctor (Science), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12029号, Conferred date:2021/6/30, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	上野 一樹	
論文審査 審査員		氏名	職名	氏名	職名
	主査	大島 康裕	教授	山崎 優一	准教授
	審査員	石内 俊一	教授		
		腰原 伸也	教授		
森 健彦		教授			

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は、「アンモニア分子の反転振動に関する状態選別と分布制御」と題し、アンモニア (NH_3) がその三角錐型の構造を大きく反転させる運動である傘反転振動について、対応する量子固有状態を空間的に選別し、さらに量子固有状態をコヒーレントに結合して分布移動を実現した研究について記載したものである。アンモニアの傘反転振動は、トンネル効果があらわれる代表例として物理化学の標準的な教科書に必ず記載されている。また、レーザーの開発へとつながったメーザー発振は、アンモニアの反転分裂準位間の遷移を用いて初めて実現され、さらに、この反転分裂間の遷移は、アンモニアが星間空間中で多原子分子として初めて検出された際にも利用されている。このようにアンモニア分子の反転振動は、物理化学において極めて重要な位置を占めてきているが、アンモニアが反転振動とともに刻々と形をかえる様子を実験的に捉えることは、現時点でも実現されていない。アンモニアの傘反転振動の実時間観測のためには、幾つかの先端計測技術の融合が必須であり、本論文はそれら基盤技術の開発と応用について詳述している。以下、各章ごとに要約する。

第1章では、分子運動の制御と実時間観測に関する従来の研究について簡潔にまとめた上で、アンモニア反転振動に関する量子論的な取り扱いを詳しく紹介している。特に、反転振動の2極小ポテンシャルに対する量子固有状態は対称と反対称の2つがペアとなること、この反転分裂間の遷移に共鳴するマイクロ波によって対称と反対称の準位をコヒーレントに結合することにより、時間とともに反転する運動状態である量子波束が生成されること、ただし、初期状態として反転分裂の両方に等しく分布した場合には全体として波束の時間発展が観測できないこと、を明示している。つまり、反転分裂の片方を選択的に取り出すこと、その上で、共鳴マイクロ波によるコヒーレント励起で反転振動波束を生成すること、の2点が実験的要請であるとまとめている。

第2章では、第一の要請である反転分裂に関する量子固有状態選別の実現について述べられている。ここでは、不均一な静電場中では反転振動や回転の量子状態に依存して力を受けることを利用して、量子状態の空間選別を行う「分子偏向器」を制作することが選択されている。まず、不均一電場中での分子の軌道を計算するプログラムを開発し、それを用いたシミュレーションに基づいて不均一電場用の電極の設計を行った。その上で実際に「分子偏向器」を製作し、アンモニアの反転分裂状態が空間的に分離できることを実証している。その際、波長可変レーザーを利用した共鳴多光子イオン化によって量子状態選択的な検出を実現し、「分子偏向器」によって単一の量子状態が選別できることを初めて実験的に検証している。

第3章では、前章の成果に引き続いて、第二の要請である共鳴マイクロ波による反転振動波束生成の実現について述べられている。まず、共鳴2光子イオン化用の電極間にマイクロ波を照射する必要があることから、電極との干渉をできるだけ避けるようにマイクロ波を集光する光学系の設計を行った。その上で、立体形状の製作性に優れた3Dプリンティング技術を利用して、マイクロ波用のアンテナ・ミラーを自作し、前章の研究で利用した実験系に組み込んだ。この、「分子の量子状態選別」「マイクロ波励起」「共鳴多光子イオン化検出」の3要素を結合した実験装置は、世界的に見ても初めてである。本装置を用いて、反転分裂の対称もしくは反対称な固有状態を選択した後にマイクロ波を照射すると、反転分裂間で分布が移動することを確認することができた。特に、マイクロ波との相互作用時間に対する依存性を検討したところ、分布移動効率が時間とともに変動する挙動が見出された。これは、光章動とよばれる光と物質間のコヒーレント相互作用に特有の現象であり、マイクロ波との相互作用によって生成した状態が量子波束であることの明確な証左となっている。

第4章では、本研究のまとめと今後の展望について記載されている。

以上のように、本論文は量子状態の空間選別とマイクロ波によるコヒーレント状態結合という先端技術を融合し、アンモニア分子の反転振動に関する量子波束生成を実証したものである。本成果は、アンモニアの傘反転振動の実時間観測に向けた重要な一歩であり、物理化学の本質的課題へ迫る意義は大きい。また、新たな分光手段としての発展も期待されるものである。このように本論文は理學上貢献するところが大きく、博士(理学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

注意: 「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。